http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第１７７５号）

指導資料

鹿児島県総合教育センター

国　語　第128号

― 小学校，特別支援学校対象 ―

平成25年10月発行

単元を貫く言語活動を位置付けた小学校国語科の指導と評価

－ノートやワークシートの活用を通して－

「単元を貫く言語活動」は，現在，小，中学校国語科の学習指導におけるキーワードとして特に重視されており，「実生活で生きて働き，各教科の学習の基本ともなるべき国語の能力」を育成するために，その位置付けを図った授業改善の工夫が全国で行われているところである。

そこで本稿では，単元を貫く言語活動を位置付ける際の基本的な考え方や指導の実際，評価について，ノートやワークシートの例と合わせて具体的に述べることとする。

１　単元を貫く言語活動を位置付けるポイント

図１は，単元を貫く言語活動を位置付けた場合の，第一次から第三次の役割及び指導のポイントを示したものである。ここで特に重要なのが，第二次，つまり，教科書教材を用いた指導の展開である。これまでの指導では，第二次における教科書教材の読みが，第三次における自分の表現に生きて働かず，課題となっていた。

そこで第二次では，教科書教材を読む目的（第三次の活動において，書きぶりを活用するなど）を明確にして，主体的に読む活動を位置付ける。この「読む目的」は，主体的な課題解決に結び付くよう，第一次で設定した単元の学習課題に盛り込まれている相手意識･目的意識に沿ったものになっている必要がある。第三次ではそのことを踏まえ，第二次で習得した知識･技能を活用して，第一次で位置付けた言語活動を自力で行い，互いに評価し合うようにする（自分の表現に適用する）。

このような構想によって，子どもの相手意識や目的意識が単元を貫き，確実に指導事項を指導することが可能となるのである。

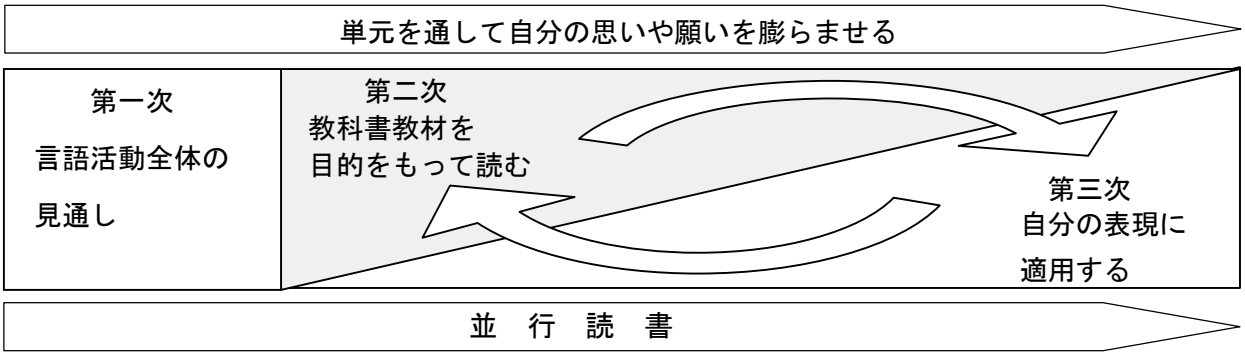


図１　単元を貫く言語活動を位置付けた単元構想モデル

「初等教育資料」５月号より引用

２　単元を貫く言語活動を位置付けた単元構想の実際（第４学年単元「読んで考えたことを話し合おう」より）

(1)　第一次における指導

単元の目標〔（　）は指導事項〕

①　場面が進むにつれて変化していく，ごんの兵十に対する気持ちについて，行動や会話に着目し，想像を広げて読むことができる。（ウ）

②　友達の発表を聞いて，自分の感想との違いをメモし，そのよさを発表することができる。（オ）

③　ごんの人物像について，他の作品を要約，引用した感想を書き，発表することができる。（エ，カ）

次	時	学習活動
第一次	1	1　これまでの物語の読み方を振り返る。
	2	2　単元名からどんな言語活動ができそうか話し合い，単元の学習課題・学習計画を設定する。 【単元の学習課題】 「『きつね』の物語」読書座談（ざだん）会を開こう。 3　教師のブックトークや範読を聞き，初発の感想を交流する。

【学習活動１について】

前単元の教材「一つの花」を読むことを通して学んだ，**表１**の「紹介するための読み方」を，ノートや掲示資料等を使って振り返る。そのことを通して「紹介する」という目的をもった言語活動を行うためには，教科書教材をどのように読めばよかったか，確認できるようにする。

単元構想における指導内容の重点化を図るためには，単元ごとにどんな基礎的･基本的な知識･技能を習得したのかを明確にする必要がある。そのために，前単元の学習状況を振り返ることのできる，このような手立てをとっておくと，効果的である。

－「一つの花」を通して－

1　紹介する材料を集めるために読む。

・　人物　・あらすじ　・出来事

・　心に残る言葉や文　・感想や考え

などからいくつか選ぶ。

2　紹介するテーマを決めるために読む。

・　「一つの花」を渡した理由

・　親子のつながり

・　戦争の中で生きること　など

3　紹介の仕方を知るために読む。

表１「紹介するための読み方」

【学習活動２について】

単元名から，「感想交流会」「読書会」など，既習の言語活動を想起させた上で，読書会について，活動の様子が分かるビデオや写真等を示し，活動に対する関心をもたせ，単元の学習課題を設定する。

そのことにより，読書座談会についての相手意識と目的意識を明確にもたせる。

【学習活動３について】

きつねが主人公になっている絵本を数冊取り上げ，教師がブックトークを行うことによって，本単元において並行読書する本を選ぶ際の参考にさせる。その上で初発の感想を交流し，教材文を概観することで，読むことへの関心を高めることができる。

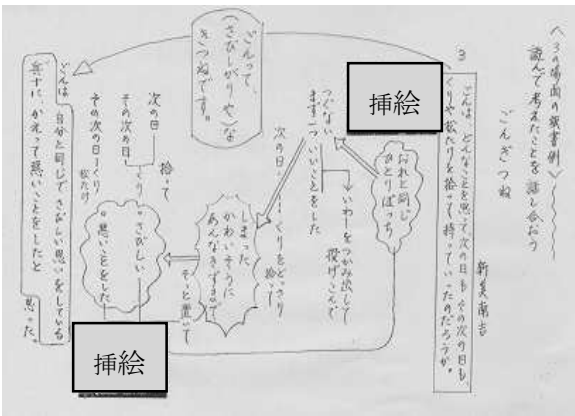
(2)　第二次における指導

次	時	学習活動
第二次	3 ～ 8	4　場面ごとに読み，「ごん」と「兵十」の行動や会話，挿絵等を基に，「ごん」の気持ちの変化や「兵十」との関係について考える。 ※　きつねが登場する物語を選んでおき，並行読書して，感想をメモしておく。（友達の本も含めて）
	9 10	5　4で整理した「ごん」の気持ちの変化や「兵十」との関係から「ごん」の人物像についての考えを，感想として100字程度でまとめる。
	11	6　書いた感想を座談会形式で交流する。

【学習活動４について】

第二次における共通の課題を「『ごん』って，どんなきつねだろうか？」と設定し，各時間の終末段階で，隣同士でそのことについての考えを対話させる。その際の根拠を，板書（ノートやワークシート）から導き出せるようにする。その際，位置付けた言語活動に生きて働く教科書教材の書きぶりの工夫を見付ける読みを行うだけでなく，**図２**のように，その捉え方を活用して，並行読書している作品の書きぶりを捉えるとともに，それらを自分の表現に適用させることも可能である。

《第二次の板書例》



ただし，１単位時間の中で教科書教材と自分の選んだ作品の両方を扱わせることが困難な場合には，自分の表現への適用については家庭学習で行わせることを考慮したい。そうすれば，学校における学習と家庭学習との一体化を図ることになり，より効果的に能力を育成することができると考える。

また，第二次を，教材文→自分の選んだ作品→教材文→自分の選んだ作品…というように，交互に読む構成にすることも考えられる。そのことで，書きぶりの工夫の，より確実な習得が期待できる。

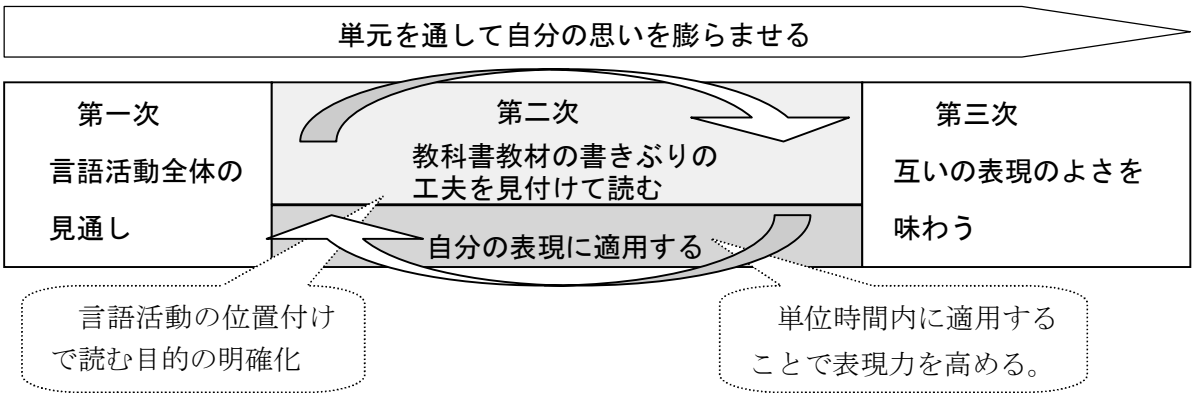


図２　単元を貫く言語活動を位置付けた第二次の改善モデル

「第 16 回教育セミナー　研究紀要」より引用

(3)　第三次における指導

次	時	学習活動
第三次	12	**7**　並行読書してきた作品に登場するきつねの人物像について100字程度でまとめる。
	13 14	**8**　書いたものを座談会の形式で紹介し，意見や感想を伝える。

【学習活動７について】

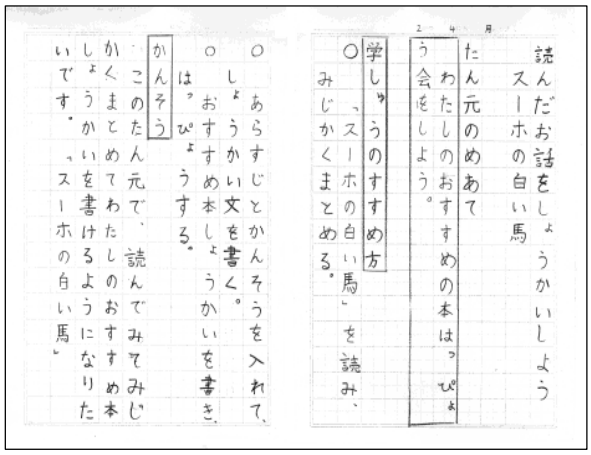
第二次の**学習活動５**でまとめた自分のノートを参考にしながらまとめるとともに，教室に掲示してある資料「人物像の捉え方」を見て，自分の作品に合った書き方を選んで書くようにさせる。

【学習活動８について】

第二次の**学習活動６**は，各グループが同時に行うものだったので，第三次では，座談会を２時間設定し，他のグループの座談会の様子を見て，人物像の捉え方のよさや伝え合いのよさを評価できるようにする。

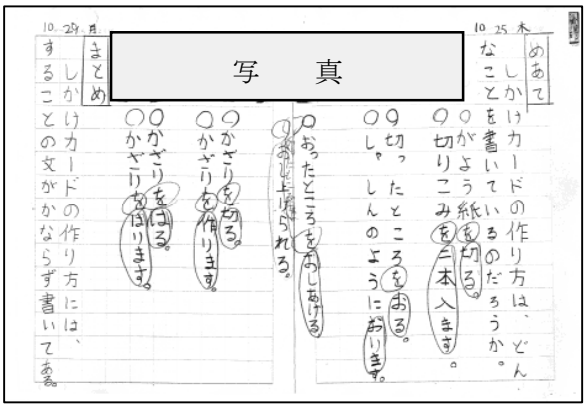
３　単元を貫く言語活動を位置付けて確かな評価を行うノートやワークシート

（鹿児島市立山下小学校の実践より）



これは，第２学年単元「読んだお話をしょうかいしよう」の第一次のノートである。「学習のすすめかた」には，第二次で「スーホの白い馬」を場面ごとに読み，あらすじと感想を要素として紹介文を書かせるという教師の意図が，明確になっている。また，できるようになりたいことを感想として書かせることによって，単元を貫く言語活動に対する関心を評価できるようにしてある。

下のノートは，第２学年単元「読んで，せつめいのしかたを考えよう」の第二次で，写真に対応する文を抜き出して書いているものである。このような形で視写させることで，「(何)を（どう）する。」という基本的な文型を習得できる。また，まとめを自力で書かせ，全体で確認することによって，内容が確実に習得できているかを，個々に評価することができる。



国語科では，言語活動を通して指導事項を指導し，各領域の能力を育成しなければならない。つまり，単元を貫く言語活動を位置付けることが指導事項を指導する際の非常に有効な手段であるということを念頭においた授業の改善が，求められているのである。

－参考文献－
○『小学校国語学習指導要領解説　国語編』平成 20 年
文部科学省
○『言語活動の充実に関する指導事例集』平成 21 年
文部科学省
○『初等教育資料　5 月号』平成 25 年
文部科学省
○『第 16 回教育セミナー　研究紀要』平成 25 年
総合初等教育研究所

（教科教育研修課）